

2011年2月24日／浪宏友ビジネス縁起観塾

数限りない教え

資料：庭野日敬著『法華三部経 各品のあらましと要点』（佼成出版社）「無量義経」

1. 無量義経の位置づけ

- (1) 無量義経の経文の中に、釈迦牟尼世尊が成道して説法を始めてから四十余年の間、真実を明らかにしなかったという内容の一節があります。

これは、人びとの程度に応じた教えを説いて、迷いから抜け出させたり、より高い悟りを得させてきたけれど、奥の奥の真実はまだ説いていないということです。

- (2) 無量義経では、大莊嚴菩薩の質問に答える形で、奥の奥の真実を説くのですが、この段階では大莊嚴菩薩を始めとする大菩薩にしか理解できませんでした。

次の妙法蓮華経によって、多くの人びとが、奥の奥の真実を理解できるように説いてくださるのです。

- (3) 無量義経は、妙法蓮華経の要点を短くまとめたものと見ることもできます。
- (4) 無量義経から入ると、妙法蓮華経がよく分かるということで、無量義経が妙法蓮華経を開く経典（開経）と言われています。

2. 無量義

- (1) 直訳すれば、「数かぎりない意味をもった教え」となります。
- (2) 釈迦牟尼世尊は、相手に応じ、場合に応じて、適切な内容の教えを、適切な言葉で説きました。そのために、毎回、教えの内容が異なることとなりました。こうして、釈迦牟尼世尊の教えは、数限りないものとなったわけです。

釈迦牟尼世尊が説いた教えは、八万四千の法門と言われています。

3. ただひとつの真理

- (1) 無量義経では、「数限りない意味をもった教えはただひとつの真理から出てくるのだ」と説かれています。どんなに内容が異なっていようとも、その根本は一つであるということです。
- (2) その「ただひとつの真理」は「無相」「実相」と呼ばれます。
- (3) 「無相」「実相」という言葉の意味・内容は、簡単に説明することはできません。無量義経では、その内容についてはほとんど説明していません。

この次に説かれる妙法蓮華経で、どんな人にも理解できるように詳しく説かれます。

4. 教化の四つの方法

(1) 釈迦牟尼世尊は四つの方法で人びとを教化したそうです。

相手に応じ場合に応じて、これらの方法を柔軟に使い分けたために、教えは八万四千通り（無数）になったと伝えられています。

(2) 四つの方法とは、次のようなものです。

① まず、人びとの望みを聞いて、世間的な道徳、倫理を説き、人びとを喜ばせました。

なにはともあれ、安らかな家庭が営めるように、社会人として生きていけるようにという段階です。

人のものを盗ってはいけない、人に迷惑をかけてはいけない、やたらに怒ってはいけない、お酒に飲まれてはいけないなど。

社会人として守るべきマナー。

経営・ビジネスの世界では、ビジネスマナー、電話のマナー、組織の基本的なルールなどがあります。

② その人の資質に応じて善いことをさせながら、その人の資質の向上を図りました。

釈迦牟尼世尊は、人びとがよき家庭人、社会人として生きることを重視していました。

このため、人と調和する、人の役に立つというような、家庭的、社会的な意味を持つ資質の向上を重視しました。

③ 資質に問題があるときには、資質の改善あるいは転換を目指しました

問題のある資質とは、家庭生活、社会生活を阻害する資質です。

「真理・法則を知らない」、「真理・法則を学んでも無視する」、「貪欲（とんよく）が多い」、「怒りっぽい」、「怠け癖がある」、「人を傷つける言葉が多い」、「嘘が多い」、「順序立てて考えられない」などの資質を持っている人は、健全な家庭生活、社会生活が困難になります。こうした資質を改善するために、教えを学び修行をすることが勧められるわけです。

④ 資質が高まり、行ないも高まってきた人には、「縁起の法」を活用する道を教え、宇宙の大生命と一体となって生きる段階に導きました。

家庭も社会も、宇宙の大生命によって営まれていますから、宇宙の大生命のはたらきである縁起の法を活用して生きれば、理想的な家庭が営めますし、社会的な活動ができます。

そのようにして、宇宙の大生命と一体になって生きるようになれば、自然に、自他ともに幸せになる道を歩むことができます。

5. 経営・ビジネスについて考える

- (1) 経営・ビジネスの実際は、経営環境の変化、その時の状況に応じて、臨機応変に対応し、行動しなければなりません。しかも、そうした経営行動の一つ一つが、意義あるものであり、所期の目的に向かう一步一步であることが望まれます。
- (2) そのためには、経営行動のすべてが、真理に基づく揺るぎない理念から生まれ、支えられていることが求められます。経営・ビジネスの根底に真理に基づく理念があれば、激変する環境変化に対して、千変万化の対応が自由自在にできるようになります。

【参考】言葉の意味

霊鷲山（りょうじゅせん）

インドの東北部ビハール州のラージギル（王舎城）は、釈迦牟尼世尊ご在世時代に栄えたマガダ国の首都。ラージギルの南に霊鷲山がある。グリドラ・クータ山。耆闍崛山（ぎしゃくっせん）。釈迦牟尼世尊はここで数々の説法をされた。現在も多くの巡礼者が訪れる。

三昧（さんまい）

心が静かに統一されて、安らかになっている状態。何ものかに心を集中することによって、心が安定した状態に入ること。「禅定」「観」も同じ意味。

高貴で安らかなものに心を集中することによって、自分の心を清めることができる。

方便（ほうべん）

人々を真理に導くために用いられる正しい方法。具体的なありかたは相手に応じ、場合に応じて千差万別となるが、根本には常に真理が流れている。

現代では、本来の意味が見失われて、目的を遂げるために用いるその場しのぎの便宜的な方法とというような意味で使われている。

【参考】天台大師の考えた釈迦牟尼世尊の説法の順序

隋の時代（六世紀後半）に出た天台大師は、釈迦牟尼世尊の説法の順序・教えの内容・教化の方法などを総合的に整理し「五時八教」を立てました。

「五時」とは、釈迦牟尼世尊の説法の順序を、華嚴時・阿含時・方等時・般若時・法華涅槃時の五期に分類したものをいいます。

「八教」は釈迦牟尼世尊の教えの内容を八つに分類したものです。

天台大師の五時は、歴史の事実としては否定されていますが、無量義経や妙法蓮華経には、五時に通じるような文面が出てくる場合があります。以下、五時について簡単に見ておきます。

1. 華嚴時

釈迦牟尼世尊は、菩提樹のもとで成道した後、海印三昧という禅定に入り、そのなかで十方世界から来集した法慧・功德林・金剛幢・金剛藏の四大菩薩や機根が高い人々を対象として、21日間にわたり華嚴経を説きました。この時期を華嚴時といいます。

2. 阿含時（鹿苑時）

釈迦牟尼世尊は、華嚴の教えを説いた後、鹿野苑に赴いて、阿若橋陳如等の五比丘に対して法を説きました。その後12年間にわたり、阿含経（長阿含・中阿含・増一阿含・雑阿含）を説きました。この時期を阿含時といい、また鹿野苑で説きはじめたことから鹿苑時ともいいます。

3. 方等時

方等時とは、釈迦牟尼世尊が阿含時の次に説法された16年間をいい、ここでは『解深密経』『楞伽経』『勝鬘経』『阿弥陀経』『無量寿経（双観経）』『観無量寿経（観経）』『大日経』『金剛頂経』『蘇悉地経』『維摩経』『首楞嚴経』『金光明経』等、数多くの権大乘の教えが説かれています。

4. 般若時

般若時とは、方等時の次に説法された14年間をいい、靈鷲山や白露池で、摩訶般若・光讚般若・勝天王般若・金剛般若・仁王護国般若等の『般若波羅蜜経』が説かれました。

5. 法華・涅槃時

釈迦牟尼世尊は、最後の8年間に靈鷲山で『法華経』を説き、涅槃の直前の一日一夜、沙羅林において『涅槃経』を説きました。この時期を法華・涅槃時といいます。